『予防時報』、56年の温故知新

「予防時報」がスタートしたのは、戦争の傷跡がまだ生々しい1950年であった。以来、延々56年にわたり季刊誌として、休むことなく発行されてきた。最新号は225号で、発行しているのは日本損害保険協会である。災害防止活動が重要という立場から、はじめは火災予防が中心だったが、今では交通安全、自然災害、産業災害など、社会のリスク全般を取り上げ、主に専門家が執筆した小論を掲載している。今まで掲載した小論の総数は、ざっと1,500編に上る。

21世紀に入り６年たった現在、「社会生活の安全・安心」、つまり社会におけるさまざまなリスクとどう付き合ってゆくのか、それは私たちの最大の関心事になっている。

そこで「温故知新」である。過去の出来事から教訓を学んでこそ未来を考えることができる。56年の歴史を持つ「予防時報」の、1,500編の小論は、したがって、安全・安心の未来を考える材料に溢れた宝庫と言ってよい。

1,500編は、廃墟の日本が21世紀の今日のかたちにいたるまでの時代を映す鏡になっている。

60年代までは、アメリカの生活水準を夢見て生産技術向上に専念し経済成長を続けた。70年代は、公害への反省からエコロジーに関心が高まった。80年代は、経済大国として頂点を極める一方で、環境問題や伝統的価値観の崩壊など、その歪がもたらす影を感じるようになった。90年代は、グローバリゼーションという名のアメリカ化の時代になった。特に市場における競争の激化が、私たちの社会生活のすべての局面に影響を及ぼしている。1,500編の小論はまた、そうした時代ごとの災害予防の視点からの証言集である。

とはいえ、1,500編を読み解くのは簡単ではない。そこで、まず要旨のデータベース化を目標に、「はやわかりプロジェクト」を組織した。とりあえず分野別に担当者を決め２年がかりで作業を進めたが、その過程で現在にも通じる珠玉の小論が多数あることに気がついた。

この冊子は、予防時報56年の蓄積の中から、担当者が推薦する小論を中間報告としてまとめたものである。

ご一読をお願いしたい。

2006年３月

予防時報はやわかりプロジェクトリーダー
小出 五郎